

東京はヨーロッパにある？

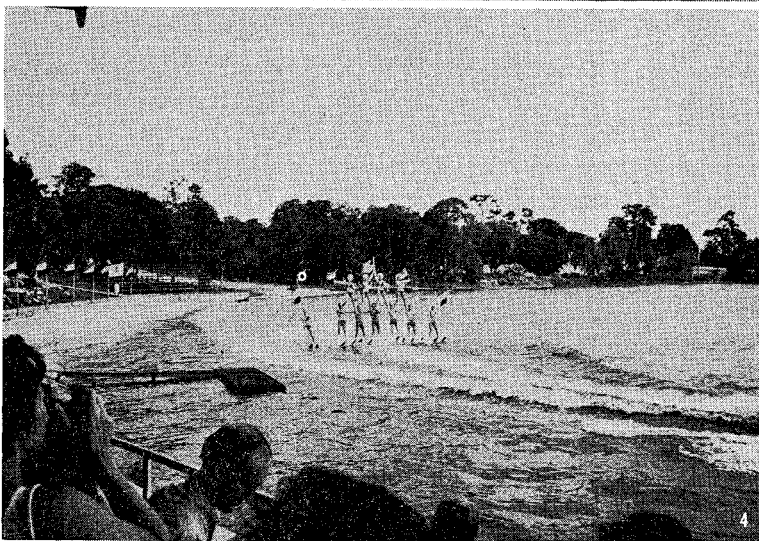
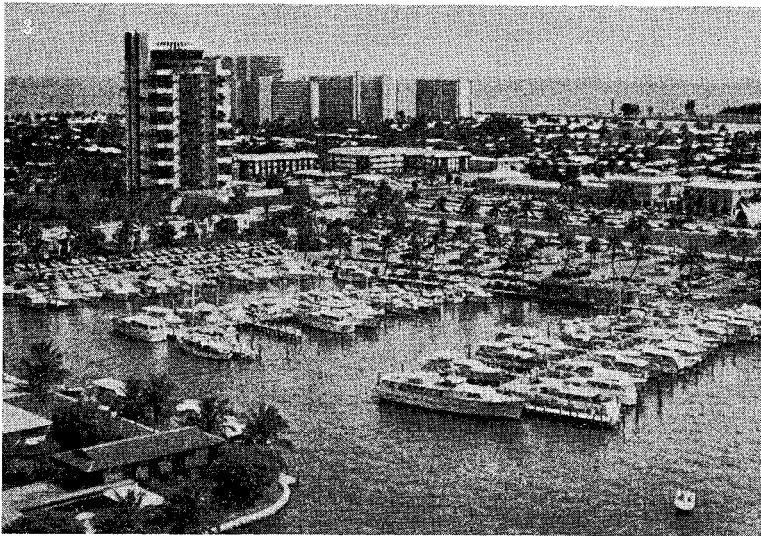
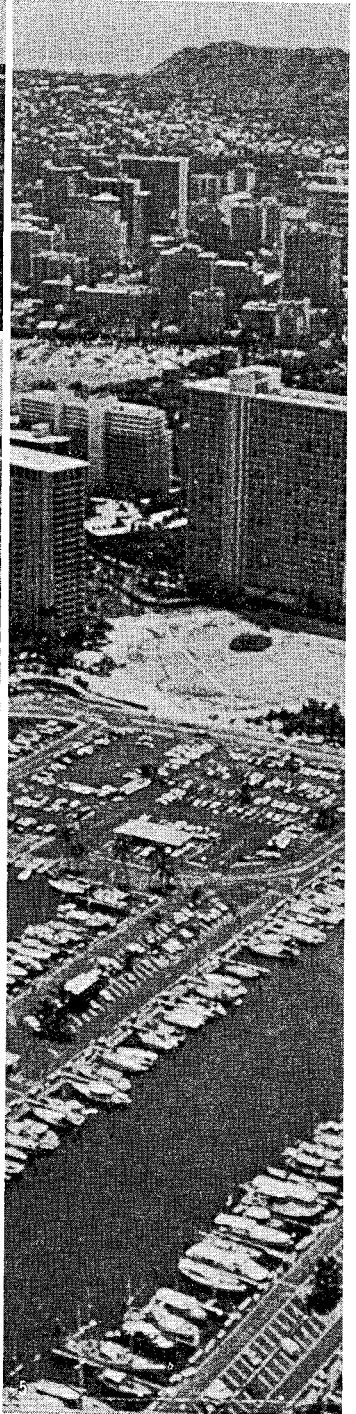
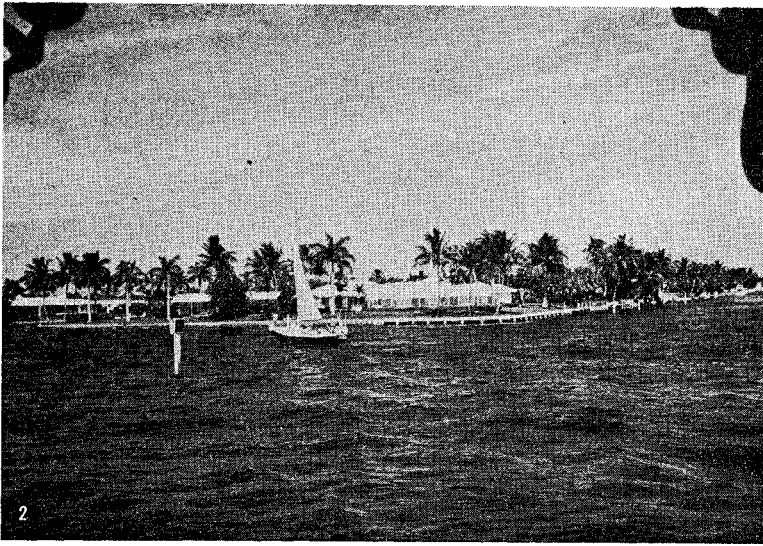
ミシシッピの夏は暑い。昼間は、この古い建物がたてこんでいる街も死んだように静かになってしまう。風がそよともしないし、夕立もこない。それでも午後5時ともなると通りを走る車の数も増し、家々のポーチでは、安楽椅子にすわって夕暮の街をぼんやりと眺めやる人びとの数も多くなる。真赤な太陽は、町の西を流れるミシシッピ河を越えて果てしなく広がるルイジアナの湿原へと落ちていこうとしていた。私は町を見おろす丘の上のレストランでマイクと夕食のテーブルを囲んでいた。マイクは、春に、ミシシッピの大学で修士課程を終えたばかりの小柄だがきりっとした感じの好青年である。私は連邦政府の研究調査官として、この南北戦争の古戦場として由緒の深い町に駐在しており、彼もまた一緒に仕事をしている仲であった。この地方独特の魚貝類の入ったガンボースープとグリルドステーキのメインコースをすませ、あとは、この店自慢の厚さが5インチもありそうなレモンパイのくるのを待ちながら、マイクととりとめのない会話を交していた。といっても、午後の会議で議論していたニューオーリアンズからメキシコ湾に抜ける大水深運河建設に伴う環境問題とか、ハワイのヒロ港津波防波堤の模型実験のスケール効果はどうかといったことではなくて、休日にはどこに遊びにいこうか、なにしろ暑いからな、昼間オフィスでジェーンの話していたパイロキシカペンサコラの海水浴場に行くのもいいかもしれないといった類のものであった。パイロキシといえば、春にガンター博士と通ったときに立ち寄ったフランス料理店を出してくれたローストオイスターはうまかったな、またシーズンがきたら、何か調査すると称して出かけなくちゃいけない、などと考えていた。そのときだった。マイクが感にたえたようにいったのは……「いいなあ、君は東京で大学にいったんだろう。東京ならパリにも近い

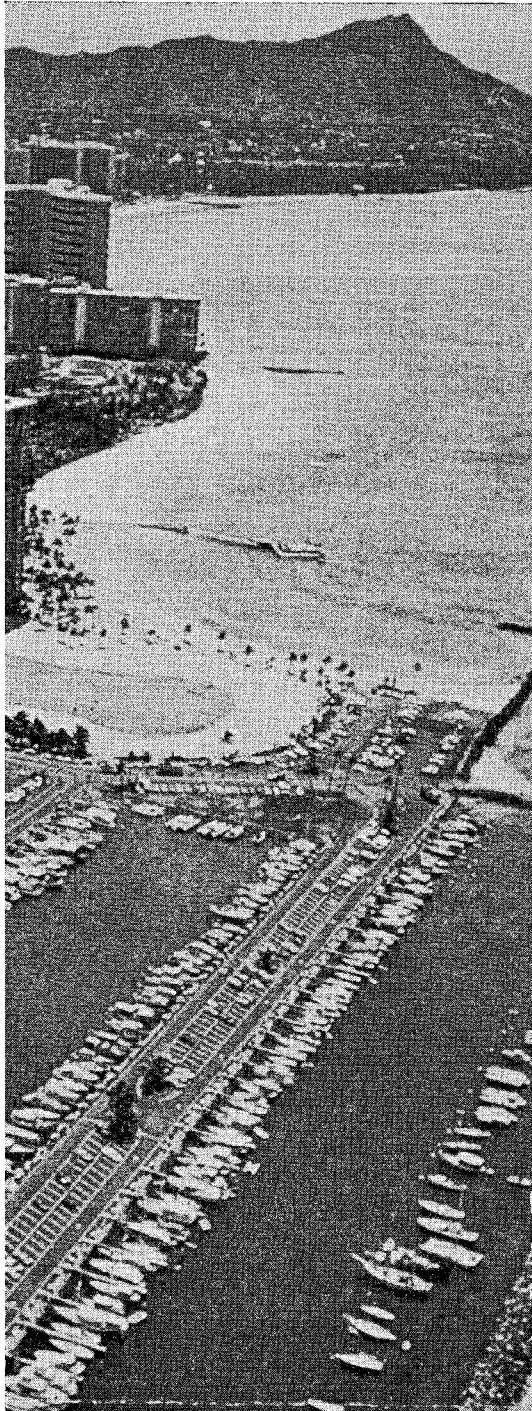


からときには遊びに行けるだろうしなあ」。私は哑然としていた。彼の顔をしばらくはまじまじと眺めていたかもしれない。しかし、彼はいかにもうらやましそうにこちらをみている。彼の卒業した大学は、ここからさらにアラバマ寄りの農村地帯だったな、アラバマからテネシーの方に行くと、太平洋戦争のことを知らない人たちもいるという話をきいたな、しかし、彼は、大学の土木工学科を優秀な成績で卒業したとハドソン課長が話していたのを思い出す。どう答えたものだろう、あまり長く考えるひまはなかった。「そうはいつでも、パリまではかなりの距離があったからね」と、そこで私は一息いれた。「出かけるのは連休の週末か学期休みが多かったな。友だちと一緒に、夜遅くまでショウを見たり、明け方まで飲み屋でねばったりしたものさ」。

アリゲーターとオレンジの水理学

ゲインズヴィル空港のターミナルビルを通り抜けると背の高いジョンが待っていた。すぐに機内へ。17人乗りの小型機だが、インテリアは豪華で、テーブルを囲むように座席が配置されている。AW コーポレーション所有でジョンは同社の技術部長である、「ウェルカム オンボード、ミスターサコウ、きょうはタービュランスも少なく快適なフライトでしたよ。これからすぐ現地へ飛び





▲ 図一・フロリダ半島と海洋産業の立地する諸都市。

写真一（前々ページ）・日本なら“がんばって下さい”というところだが、余暇社会では“ハブ・ア・グッドタイム”と挨拶する。

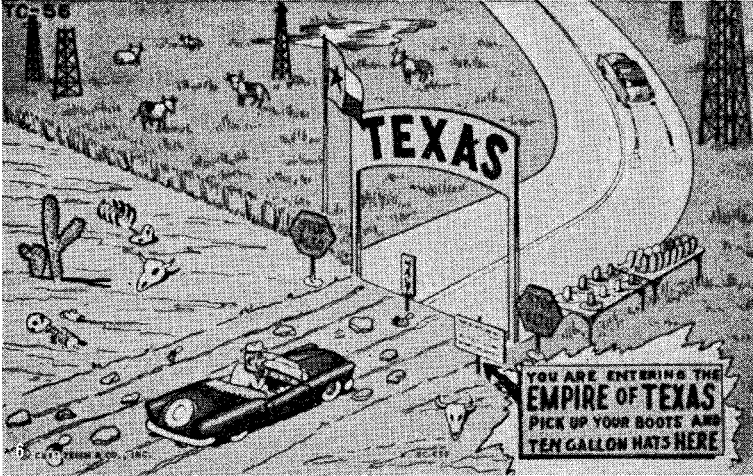
写真二（前ページ）・ウォーターフロントコミュニティの都市計画では、水路がメインで自動車道はサブになる。

写真三（前ページ）・マリナーは海洋性リゾートの玄関口であり、また都心でもある。

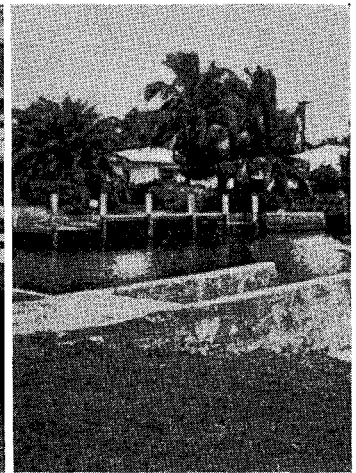
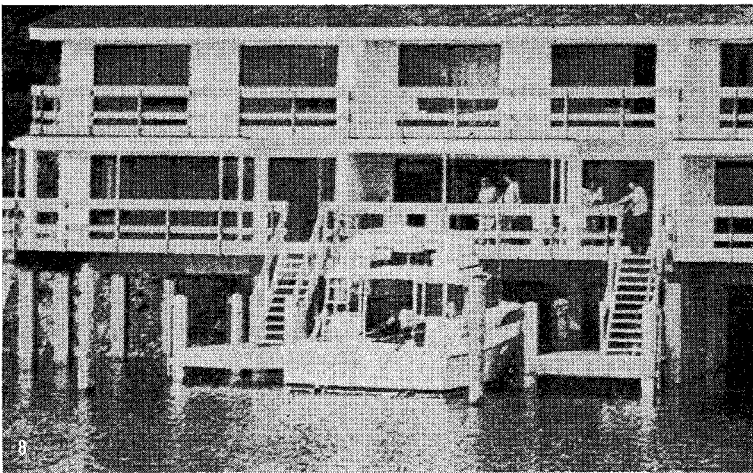
写真四（前ページ）・森と湖の国ウォーターショウ。

写真五・ハワイでは汀線はパブリックである。アラワイヨットハーバーからハワイカイの人工海浜、ワイキキ、ダイヤモンドヘッドを望む。

ましよう。社長も向うで待っていますから」「朝早くからどうもありがとう。小型機というからもっと小さなものを想像していたら、これははずいぶん中が広いですね」「仕事用のは二、三人乗りのセスナで、社にも5機ほどありますがね、これはVIP用ですから、会議や現地視察なんかには使うんですよ。バハマまでお客とゴルフに行くこともありますね」。AWコーポレーションは、このあたりでは、かなり大手のデベロパーである。テキサス、オクラホマなどになると、小さな建設事務所でも、工事監督には自家用機を使うのが普通である。パイロットの免許も現場監督の大切な資格の一つである。「いま飛んでいるところが、フロリダ半島のオレンジベルトですね、国中のオレンジとグレープフルーツの3分の2がここで生産されるわけです。これが可能になったのは大規模なかんがい工事が行われたおかげなんです、その結果として、海岸の水理のバランスが変わってしまいましてね、なかなか自然のバランスは微妙なものです」。この半島は、主として中世代から第三紀にかけて北から運ばれてきた石灰岩質の沈殿したものが隆起することによって成立したものであるから、全土からあふれる地下水



が、あるときは、湖となり、あるときは河となって、海岸線近くで、海水との間にバランスをつくりだしている。海岸の沖側には、バリアリーフとよぶ幅が1 km ないし2 km の細長い島の列があって、この内側がラグーンになっている。このラグーンと外海とは、小さな入江をとおして、潮汐などによる交流を行っている。というわけで、地下水と表層水と海水とのバランスが半島、とく海岸部分のエコロジーを支配している。水路の開削や、水資源配分の変更などが及ぼす影響は、まさに決定的といってよいわけである。機は中央平原を離れて東へ飛び、海岸に沿って南下する。バリアリーフが幅広く突き出しているケープカナベラル、その後、月世界探険の基地としてケープケネディーと一時よばれるようになった三角の砂嘴である。コア・ビーチ、メルボルン、ジュピター、ウエストパームビーチと続くリゾート地帯が南へ伸びている。



写真—6・誇り高きテキサス帝国の領内では石油ヤグラの陰で牛たちが領外のサボテンと砂漠の景観を楽しんでいる。

写真—7・モバイルホームのなるぶ移動社会。

写真—8・ボートをおりてハシゴを上げればベッドルームというヨッテル。

写真—9・水の都フォートローダゲール、運河とラグーンの総延長は 165 mile に及ぶ。

「このあたりがリゾートとして脚光を浴びはじめたのは、1920年代ですね。初めてアメリカ合州国が豊かな時代を経験したときでしたが、この辺のジャングルの土地の値段が毎週のように倍増していったのですよ。もっとも長くは続きませんでした。1929年の大不況のあとでは、毎日のように不動産業者が自殺するニュースが続いたのですよ」。ジョンは博識である。フロリダは最初フランスの領地だったこと、その後スペインの手に移ったこと、この地をもともと支配したセミノールインディアンは、まだ白人との間の和平に応じていないこと、したがって、いつの日か最高裁が、土地ブームにわくこのフロリダの所有者はインディアンたちであるという判決を下すかもしれないことなどを話してくれた。眼下にどこまでも伸びるラグーンには白い船体の大型ヨットが2隻、ウエイがきれいに平行して走っている。ラグーンからは多数の運河が縦横に内陸に延び、また、埋立造成された宅地にも一軒一軒に棧橋が付設されている。「フロリダに住宅を求める人たちの理想は、ウォーターフロントホームということなんです。だから自宅の裏庭にポートをつなげるような土地は、そうでない土地の4倍も5倍も高く売れる、というわけで、デベロパーの腕の見せどころは、いかにウォーターフロントの延長の大きな分譲地を設計するかということなんです。ヨーロッパからきた人なんかは、ときどきアメリカってのは後進国だなあと笑われるんですがね、海岸線がほとんど全部私有になっ



ていて、私有権の神聖は絶対に侵してはならないというのが大原則です。「誰々所有地立入厳禁」という立札が立っていますと、そこから一步でもなかへ入ったら所有主は銃で射殺してかまわないんです、罪には問われませ

ん。所有権を守るのは市民の権利であると同時に義務なんですから。しかし、海岸線というのは連続していますから何か工事を企画しても周囲の海岸に立ち入れないというのは不便です。今日ご覧いただく箇所も、ですから空の上からよく観察していただくようお願いします」。なるほど、そのためには飛行機は必要なんだと思ったのであったが、その後調べてみると、海岸の私有がこのように徹底しているのは東部に限られ、西部に行くとなんか公共優先の考えがでてきており、ハワイにまでくると、少なくとも海岸汀線は市民に解放されるべしという大原則が貫かれている。オレゴンでは、環境問題に対する認識が高まった最近まで商業的な開発があまり進んでいなかったため、海岸地帯を州政府が買収するという措置が比較的スムーズに成功しつつある。面白いのは、海岸から沖合 3 mile までは州政府の管理に属し、海底石油などが出ても州政府の収入になるが、それより沖は連邦政府に属するというのが原則であるが、テキサスは例外で沖合 13 mile まで州権が及ぶ。これは、テキサス共和国が合州国と対等の立場で合併をしたという歴史的な根拠に基づくもので、テキサスはオイルリッチと称される由縁である。

機上調査を終えて機はすべるように滑走路へ。立札をよく見て、こんなところであえない最期を遂げないようにしなくてはと、自身にいいきかせながら、私は柵の外に待っているリンカーンコンチネンタルに向かって歩いていった。

市長さんはパートタイム

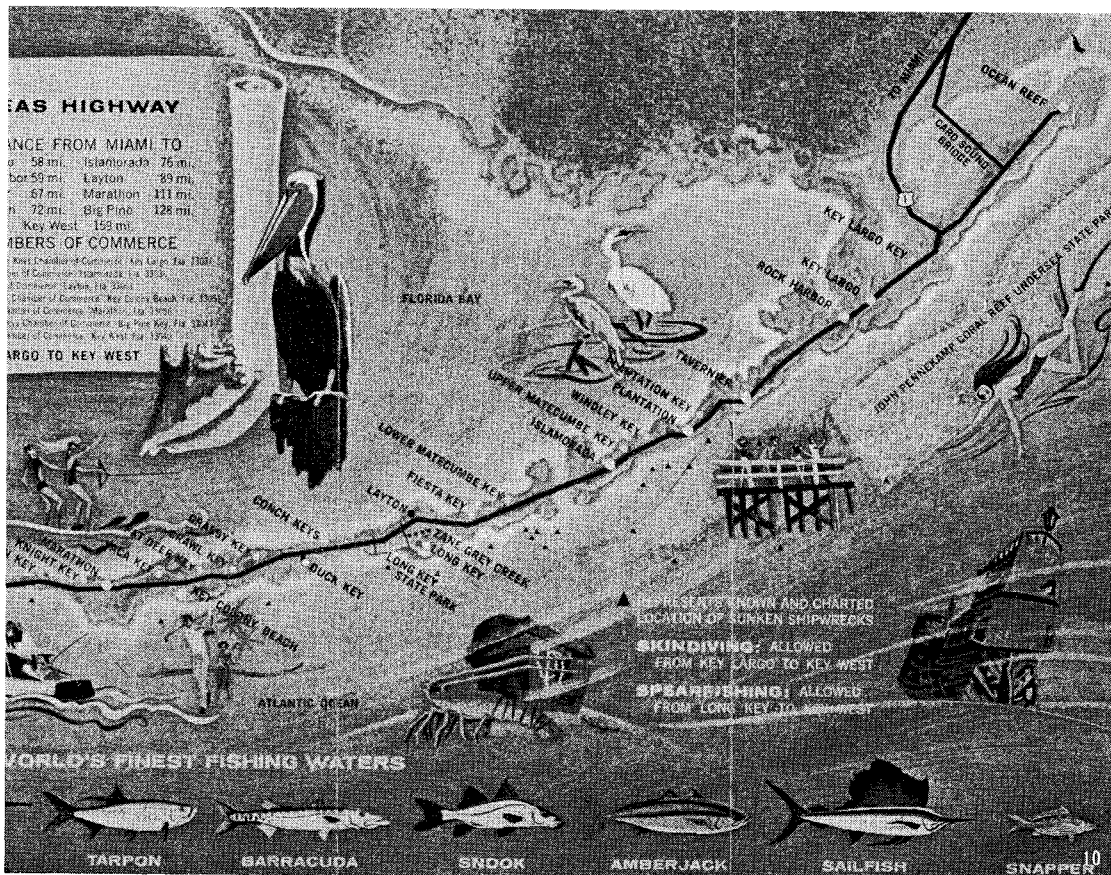
朝早いというのに市の公会堂は聴衆でうまっている。壇上ではフロリダ大学海岸工学研究所長のブルン教授が大きく両腕を広げてナイフとフォークを使う姿勢をみせながら熱演している。「いくらあなたがナイフやフォークを与えられても、皿の上に料理がなかったとしたら食べるわけにはいきません、そうでしょう？同じことが海岸についてもいえるのです。海岸にいくら突堤を建設してみても、波や流れで動いている砂がなければ海岸には砂はつきません、海岸は空腹のままなのです。こういった海岸のことを、私は栄養不良の海岸と呼んでいます。このような海岸の栄養状態を改善しようと思ったらどうすればよいでしょう？適当な手段を講じて砂を供給してやることです。そのうえで護岸や突堤を建設してやれば、初めて肉づきのよい健康な海岸というのが造成できるというわけでありませぬ」。今日は市の立案した海岸

る。市民との対話なくして土木のプロジェクトもないということであろう。卓上のベルがなる。市長が受話器をとると、私にももう一つ受話器をとるようにと目で合図する。電話会議である。ジャクソンビルの工兵隊司令官とタラハシーの州海岸部長がでている。土木の公共事業は州政府や第三セクター的な機構によって行われることが多いが、水面が含まれるプロジェクトには連邦政府が責任を分担する。外郭施設は工兵隊が建設する。建設省と運輸省を合わせたような官庁であるが、国防省の一部であるため、トップは軍人によって占められる。文官としての土木技術者の連邦政府官僚機構内部での地位は、日本と比較すると低い。連邦政府によるプロジェクトは、各個ごとに議会による立法が必要とされるので時間がかかる。日本は比較的官僚の力が大きく、合衆国はコンサルタントや議会の力が大きいといえよう。電話会議は、議員対策や模型実験のことを決めて終わる。「さてもうお昼ですな、キューバ料理などはどうです。アペ

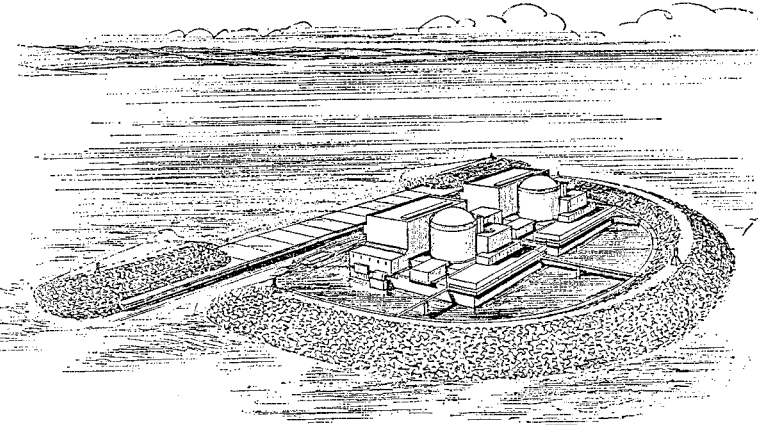
リティフはキューバンダイキリで?」「まったくいい考えですね」と答えて、私は勢いよく席を立てていた。

セイルよ、あれがマイアミの灯だ

岸壁にかけ渡された 2m ほどの板を渡るともうそこがドアだ。今日の会議の秘書をつとめたジュディーの肩を押しながらなかに入る。「やあ、もうはじめてるよ、飲みものの注文があったらこのお嬢さんたちにいってくれ」。ホストのビル・リチャードソンが日焼けした顔をほころばせながら自分の娘たちを紹介する。彼の名を冠した流速計は広く世界で使われている。「こんなに大勢乗って大丈夫かな?」「いま全部で 30 人ぐらいかしら、50 名まで心配ないって、父が計算していましたわ」。そうか、ビルの流体力学なら信用していいだろう。中央に四角くカウンターがとってあり、窓辺に沿って椅子、2 階へのぼるハシゴ。「まだ内部は建設中なんですよ。船体だけは造船所でつくってもらいましたが、あとはドウ



▼ 図-2・ニュージャージー州沖合に建設される海上原子力発電所。フロリダ州のドックヤードで製作された浮揚プラントが、ドブス堤に囲まれた水域内にアンカーされる。



イトユアセルフ方式で。それでももうここは2番目の寄港地です。ハウスボートリビング、これが現代フロリダのもっともファッションナブルな生活スタイルだ。陸上ではトレーラーパークがあちこちにあって、モバイルホームが軒をならべているが、その海洋版というところである。黒川紀章説くところのホモモーベンスのつくる都市、しかし一方では、ヴァンス・パッカーの「見知らぬ人々の国」で指摘されているような安

定した人間関係への指向は、コロンビアのヴィレッジセンターをつくりだしている。都市計画の新しい課題である。そして、ここで都市というとき、それは海岸線を越えて青いスペースに広がる。ここから北100mileのところには建設がすすめられているディズニーワールドにはEPCOTと呼ばれる未来の実験都市が計画されている。水上生活がふんだんに取り入れられるという。さらに北に行くと、ニュージャージー沖合には海上原子力発電所の建設が決まっている。海上都市時代の幕明けだ。幌馬車を駆って西部の平野を越えた国民は、ハウスボートにセイルを揚げて青い海原を越えようとしている。パイオニア・スピリットというお守りを胸に。バーを離れて見まわすと、ひげのなかから赤い口を開いて、なまずの唐あげを頬ばっているのは、化学者のディックだ。「去年からこの近くのノヴァ大学に移ったんだ。大学院の博士課程しかない大学でね、しかも海洋学と教育学しかない。学生も教官も仲間のようにして研究をする塾のような大学でね。このあたりにはそういった実験大学のようなものがふえているんだ。ポストインダストリアル社会というのかな、伝統とマスプロの大学から脱け出す道を実験的に探り出していこうとしているんだろうな」。部屋のすみからケンがあらわれた、人魚のようなパメラも一緒だ。「珍しいところでお会いしましたね、フロリダははじめてじゃないでしょう?」。ケンは私がハワイ大学にいたときの学生だ。「昔、1年たらずかな、まだ海岸に行くところから左は黒人専用なんて立札がでていたころね」「フロリダは、歴史的、地理的にはれっきとした南部ですがいまでは住民の半数は南部以外の出身でしょう。それだけに、どちらの制約からも自由な実験のできる州になりつつありますよ。実は友人と海洋土木の事業をおこ

したんですが、雰囲気自由なこと、海洋性リゾートのアメニティーに魅せられて全米から人材を集められますから、ロングビーチ、サンディエゴ、ヒューストン、ボストンといった海洋産業のメッカのなかでもマイアミを中心としたこのあたりが、もっとも有望のようです。いまは養殖池造成などが主ですが、ビスケー湾沖には海上空港計画もありますし、カリブ海沖の共同実験水域の設定など面白くなりそうです。夜更けて、数人の仲間とヨットを走らせる。水が重い。月が出ないのか空は暗い。舟のおこす波が水路壁にあたって砕ける。これが設計波なので、あまりスピードアップしてはいけないのだそうだ。東へ進むと西半球のベニスといわれるフォートローダーダール、南に下がるとマイアミから外洋を100mileの海上架橋で結ぶフロリダキーの多島海、東にはバハマをはじめとするカリブ海の島々がある。「今夜は行けるところまで行ってみようか?」。隣に立っているジュディーの肩をそっと抱き寄せて私はささやいた。

大西洋岸、メキシコ湾岸、太平洋岸、カリブ海、南太平洋諸島、アラスカの北極海沿岸とアメリカ合州国の海岸は、地域によって様相を異にする。オレゴンやメインの漁港、ロングビーチやガルバストンの工業港、サンディエゴや真珠湾の軍港などをあげることもできるけれど、なんといっても圧倒的な延長をほこるのは、リゾート、公園、リクリエーション地区としての海岸であり、国として、州としての行政や技術の主要な部分も、また、公共および民間投資の主要部分もこれに向けられている。大陸棚海域を含めたコースタルゾーンの多目的マネジメントが、この国の来る10年間の中心的課題である。

● 次回は「ネパール」の予定 ●